書評

「小確幸」文学から、「食の起源」まで

武庫川女子大学教授　藤本 憲一

「アフタヌーンティー」と都鄙間の嗜好格差

嗜好品といえば、和文脈では「栄養のためでなく、快感のためにとるもの」とされ、実際、国語辞典にもそう記載されている。ところが、当方が英文脈で嗜好品を紹介する場合には、"SHIKOHIN＝refreshing favorites／anti-stressors"（気分転換できる、お気に入り品／抗ストレス要因）と、わざわざ自らの英訳定義をつけて紹介するのが、習いになっている。

こちらでそう規定しておかず、翻訳者まかせだと"luxury items"（贅沢品）などと英訳されてしまうからだ（実際、和英辞書には、そのように記載されているものもある）。

この背景には、おそらく垂直階層性の高い欧米社会と、水平に大衆的な日本社会の違いがあり、嗜好品がそれぞれの社会に占める位置づけの違いがあるものと考えられる。当方は、2001年にニースで開催されたARISEという国際嗜好品会議に出席したが、やはりそこでも、欧米圏研究者の「貴族主義」的ともいえる、ともすれば嗜好品を上流階級の特権的アイテム由来とみなす印象を受けた。もちろん、21世紀の現時点では、嗜好品は広く大衆化しているが、その近代的起源において、「欧米から」「上流階級から」全世界へ、大衆へ広がったという、「トリクルダウン」と呼ばれる垂直的普及プロセスを想定しているようだった。

そして昨今の禁煙・禁酒ムーブメントによって、喫煙・飲酒コストは相対的に高まっているため、本当に再「贅沢品」化する恐れもある。そして現代日本においても、嗜好品が「贅沢品」として機能している描写を、最近の小説で目にした。もちろん日本が舞台なので、階級・階層格差の描写もさることながらも、都鄙格差の中で「贅沢品」が強調されているのだ。

たとえば、みなさんは「アフタヌーンティー」を楽しまれたことはあるだろうか？　ーブランド固有名詞としてのそれでなく、普通名詞としての「イギリス式のゆったりした喫茶飲食習慣（ハイティーと同一視されることも）」の、それである。豪華な装飾陶器ポット入りのたっぷり紅茶と、サンドイッチ、スコーンからスイーツまでが何段か重なった鳥籠っぽいケーキスタンドに乗っかった、見た目も値段も、何より消費に要する時間がゴージャスな一品。まさに一流ホテルで楽しむなら、"luxury items"の範疇にも入る嗜好品だろう。

これまで地方都市暮らしの虚しさ、寂しさを鋭く描いてきた、富山出身の作家・山内マリコ氏が、東京的「疑似貴族」ライフを描いたのが、**山内マリコ『あのこは貴族』**（集英社 2016/2019）。この中で、東京はえぬきブルジョワ暮らしの象徴として、アフタヌーンティーが効果的に描かれる。外国の観光旅行先でなく、日本のホテルでフツーに、それが消費される場面だ。

ふつうポッと出の成金趣味では、家・車・宝飾品という耐久消費財寄りの「贅沢品」、あるいは酒池肉林の大散財に無駄金を使っても、日常に根づいた、ふだん使いのシブイ嗜好品には、気が回らないもの。そこが、生まれつきの上流階層との違いだ。山内氏の描く、東京・松濤生まれの自称・家事手伝い「貴族」女性は、その消極性ゆえに結婚相手探しに苦労する。当たり前のように、帝国ホテルやパークハイアットホテルのティールームをふだん使いし、ちょっと気分が上がれば、そこでアフタヌーンティーも楽しんじゃう。その意図しない天然の「上流（都）意識」ぶりを、鄙サイドの人間はこう表現する。

『・・・本人に訊いても普通としか答えないんだもん／それ、あるあるかも。お金持ちの家ってお金持ちとしかつるまないから、本気で自分ちのことを普通だと思ってるんですよね。相対化できないんですよ。あの人たち／だからどこかズレてるっていうか、ボケてるんだね・・・』

いくら天然とはいえ、そこは本人も薄々自覚している。

『・・・わたし、自分の意志でテリトリーを広げるってことをしてこなかったので、東京って言っても、ずっと同じ、すごく狭いエリアで生きてるんです。怖いから行かない街もたくさんあるし。子供のころから行き慣れてる場所だけでぬくぬくしてて・・・』

かつて**田中康夫『なんとなくクリスタル』**(1981/2013) は、その過剰なまでの「贅沢品」の洪水ぶりが、かえって地方出身上京者の強烈な成り上がり趣味を明るみに出したものだが、山内氏の一連の小説は、さりげない嗜好品描写で、日本版階級といえる都鄙間格差を象徴的に浮き彫りにして、興味深い。

理論偏重、記述不在の日本の学界

都鄙・貧富など階級・階層ごと、趣味・嗜好は微妙に異なる。従来、文芸批評では嗜好品をはじめとするモノや事象を、一種の記号や象徴として読解してきた。それは、キリスト教的な伝統と相まって、イコノロジー（図像学）という文脈で、精緻な分析が蓄積されてきた（たとえば、**アト・ド・フリース編『イメージ・シンボル事典』**大修館 1984)。

これを、文学・宗教学・図像学から転じて、広く社会事象全般への展開をはかろうとしたのが、象徴（記号）人類学や構造主義分析の運動であった。日本では、文化人類学者・山口昌男氏らがユダヤ系のワールブルグ学派の業績を中心に理論的紹介に努めた（たとえば**山口昌男『本の神話学』**岩波書店 1971/1977/2014)。が、結局、日本語による現代社会の実質的な記述・分析は、あまりなされなかった。

また 1970〜80 年代のフランス社会学では、ブルデューが趣味・嗜好の差異のありようを階級的差異と連動させる視点で論じ、ずいぶん脚光を浴びた。ただ、訳本（**『ディスタンクシオン―社会的判断力批判①②』**藤原書店 1990）を見ると、記述内容が特殊なフランス社会の文脈に依存しすぎていて、日本社会への分析にはそのまま応用できない。そのため理論面が声高に叫ばれただけで、一時の流行にとどまった。今でも、ブルデュー的な嗜好・趣味の記述・分析は、日本社会学では盛んとは言えない。

日本では最近でも、やれカルチュラル・スタディーズだなんだと、欧米の「理論の上辺」だけが翻訳・紹介されては、学界や論壇のスノッブなファッションとして消費されて終わることが多い。歴史・民俗・地理といった記述の学をのぞけば、人類学でも社会学でも、一次資料読解や現地フィールドワークに基づく、実質的記述の業績があまり尊重されない。ひとことでいえば現実軽視、理論偏重の傾向が強かった。

その意味で、これまで嗜好品文化研究会の運動は、あらゆる学際的ジャンルにおいて、実質的な嗜好品描写の重要性を強調して、分厚い具体記述のムーブメントを後押しした点で、舶来輸入「理論〇〇学」の弱点を補完すべく、一石を投じてきたのではないだろうか。

嗜好品研究、かくも長き不在

次に論じたいのは、**川上未映子・村上春樹『みみずくは黄昏に飛びたつ』**（新潮社 2015/2019）である。たしかに村上文学といえば、ビールや音楽など、嗜好品的にこだわった描写が多いし、なにせデビュー時に村上氏は、まだジャズ喫茶経営者として、酒やコーヒーを提供する、嗜好品事業者でもあった。

ただ、こちらの対談本は、とくに嗜好品が描写されているわけでもない。ただ、嗜好品研究の戦略上の視点が、これまでにないほど鮮やかに浮き彫りにされている。

2020 年は子年だが、デビュー小説はじめ、たびたび「鼠という名の友人」を登場させてきた、

村上春樹氏。この村上文学の過去と現在をめぐる対談本が、なぜ嗜好品書評の対象になるかといえば、嗜好・趣味の変化について「ムラカミ以前と以降」を村上氏自らが画期する、新鮮な知見が得られるからだ。この点、バックグラウンドを振り返りたい。

振り返るよすがに、まず、20年間にわたる嗜好品文化研究会の役割を位置づけてみると、それまで「文学」「趣味」領域に閉じ込められてきた嗜好品を、あまねく人文・社会・自然諸科学の各ジャンル、より広い実証科学のコンテクストに開いていく運動（ムーブメント）性にあったと言えるだろう。

そもそも当方が哲学や社会学を学んでいた1970〜80年代は、とても「嗜好品文化」が、学問研究の対象になるなど、信じがたかった。より広い「食文化研究」でさえ、まともな学問ジャンルとは考えられていなかった。当時の大阪大学の哲学・社会学系講座は、文化人類学系講座に隣接しており、教員・学生ともに交流が深かった。が、当時の文化人類学の多数派は、「政治・経済・宗教がメインストリームであって、食文化なんて道楽・余暇に過ぎない」とみていた。

当時からの白眼視に負けず、食文化研究に邁進されてきた石毛直道氏らの胆力は大したものだと思う。ようやく世間の側も、浩瀚な著作集（**『石毛直道自選著作集 第1期①〜⑥』**ドメス出版2012）刊行をもって報い始めたあたり、趨勢の変化を感じる。

哲学・社会学でも、食文化や嗜好・趣味の研究は軽視されていた。わずかに趣味・嗜好に鋭い嗅覚を持つ一派として、ユダヤ系のフランクフルト学派が知られていたが、講壇派からは「文学趣味に傾いた一派」とみなされていた嫌いがある。

その一人ベンヤミンの著作は、読書子の人気を集めていた（たとえば**『ヴァルター・ベンヤミン著作集①〜⑮』**晶文社 1969〜1981）。アドルノの音楽社会学分析も、趣味・嗜好に対する鋭い批評を含んでいた。フランクフルト学派は、非主流派ながら論壇に根強い人気をたもっていた。

かくいう当方も、1960年代初頭にアドルノに師事した徳永恂先生の演習で、『啓蒙の弁証法』などのテキストを、文字通り噛みしめていた。当時すでに『現代思想』誌上に訳出を終えていた先生が、訳書（**『啓蒙の弁証法—哲学的断想』**岩波文庫2007）を出す「おさらい」として、大学院生とともに読み直していた（当方は院を放り出されて編集者になっていたが、仕事をサボって演習に参加）。抽象的観念と、具体的な事象の記述が、詩的な文体で紡がれるアドルノ本は、ところどころ**九鬼周造『「いき」の構造 他二篇』**岩波文庫1979を彷彿させ、趣味・嗜好への洞察を含んでいた（九鬼とアドルノは、ともにハイデガーとの対決の中で、知を養った）。

ちなみに、哲/史/文と三題噺で呼びならわされた文学部のクリシェを解体し、「人間科学」というフシギな名称で世俗・実証・科学化（ついでに教員ポスト増も・・・）をはかったのが、わが大阪大学の大いなる「功績」である。同学部発足の1972年以後、「人間科学」は、現在に至るまで、大学ギョーカイにおける最大のヒット・ネイミングであり続けている。

村上春樹と河合隼雄に（別々に！）邂逅した1979年

そういうわけで、1970〜80年代、石毛氏のような先覚者をのぞけば、趣味・嗜好を論じるのは、広義の文学（詩・小説・文芸批評など）の役割だった。

そして当方が大学3年を迎えた1979年、個人的に二つの衝撃があった。村上春樹デビュー小説「風の歌を聴け」の『群像』掲載と、人間科学部集中講義への河合隼雄氏の来講である（その20年後、両氏が意気投合して共著本を出すなど、想像だにしなかったが・・・）。

それぞれ当方に強烈な印象を残し、即座に両氏のファンになり、著書を耽溺するようになった。まず村上春樹氏の小説。当時、ブンガク好きの友人たちが「まったく新しい才能」と騒ぎ出し、ブンガクに造詣の深くない当方まで、掲載誌を買いに走るブームとなった。

当方なりに惚れ込んだポイントの第一は、とにかく読後感が爽やかで、「猛烈にビールが飲みたく

なる」点。同時に主人公が非政治的、非情動的人格のため、「しらけ世代」「新人類」（もっと言えば「ノンポリ（ティカル）」「ノンアンガジュマン」「ノーコミットメント」など）と揶揄された自分の世代にフィットしており、感情移入しやすかった点。

とくに嗜好品文化論から言えば、エッセイ（たとえば『**村上朝日堂ジャーナル うずまき猫のみつけかた**』新潮社 1999）の中で、「小確幸」という概念を提示した点。人口に膾炙し、国際的にも広く知られるこの概念は、従来の酒・たばこ・コーヒー・茶など狭義の嗜好品概念から拡大展開した、われわれの広義の「嗜好品」定義 "SHIKOHIN＝refreshing favorites／anti-stressors" にも、非常によく合致しており、時代に先駆けていた。

次に当時、ユング理論売り出し中の京大教授・河合隼雄氏。河合流に解釈・翻案されたユング説は、彼一流のユーモアあふれる語り口（けっして目は笑ってない）もあって、講壇哲学・講壇社会学に飽き足らない当時の学生の好奇心に、見事にフィットした。無意識的な深層心理を、わかりやすいチャートに図解し、非合理かつ不可視の混沌を「見える化」してくれた点で、画期的だった。

当時からこのジャンルは翻訳が充実していたため、ユングやフロイトの原典にも親しむことで、ますます精神分析全般にハマっていった。しかし、はたして精神分析は、どこでどうやって「小確幸」と結びついたのか？　当たり前だが、当時はもちろんのこと、その後も長らく謎だった。

「テーマ」「情念」主義から、「集合的無意識」へ

その謎が、**川上未映子・村上春樹『みみずくは黄昏に飛びたつ』**（新潮社 2019、以下『**みみずく**』）を読んで、氷解したのだ。年長の村上氏の内懐に、ぐいぐい肉薄するインタビューをやりぬいた、若手の川上氏の功績大といえるだろう。

まず村上・河合氏の接近が、あくまで村上氏側からの、物語創作上のバックボーン、理論的支柱を求めての接近だった点。『**村上春樹、河合隼雄に会いにいく**』（新潮社 1996/1998）という対談本のタイトルにも、そのベクトルの方向性は正直に現れている。

村上氏が文壇に反発していたのは当時から知っていたが、既存の有名小説家、とくに中上健次氏に反発していたことは知らなかった。一言でいえば、それは当時主流と目された「テーマ（主題）主義」「自我中心主義」「情念主義」「アジテーション的言動」に対する強い違和感だったという。

デビュー時期は異なるものの世代的に、村上春樹（1949～）は、中上健次（1946～1992）と村上龍（1952～）の真ん中で、ほぼ同じ団塊の世代に属する。ところが、『**みみずく**』によると、中上・村上龍を「旧世代の代表」とみなし、当時はそこから距離をおこうとしたようだ。

そして、中上氏らから遠ざかる分だけ、河合氏に接近したといえば、単純な図式になり過ぎるだろうか。この事情を知らなかった当方は、ハルキ小説や河合ユング理論と並んで無節操にも、中上健次氏のカッコイイ音楽評論にもハマっていた。たとえば、『**破壊せよ、とアイラーは言った**』（集英社 1979/1983）にかぶれて、アルバート・アイラーをはじめとする、前衛的・戦闘的ジャズを好んで、中古レコードを買い漁っていたのだった。

…アイラーは確かにそのジャズで、否定せよ、破壊せよ、と言った。いや、それは単にアイラーだけではなかった。全てがそう言い、そう唱和した。その声を耳にし、口にした者が無傷なまま、このように社会が平穏になり、資本がらん熟し、若向文化が牙を抜かれたサブカルチャーとゆ着した今を生きられるはずがない。この社会や文化、

状況、を否定するのなら、ファシストにも、テロリストにもなろう。・・・(中略)・・・／　破壊せよ。／　状況はますます不利になっている。あれほど、あの時、露呈していたコードが、法・制度が今は隠蔽されてしまい、ジャズを聴く者に通俗化、風化を強いる。破壊せよ。何もかもためらう事なく破壊せよ。革命とはコードの破壊、法・制度の破壊の中にしかない。そのアイラーの毒の声は、デビスを聴く私の耳元にあり、エルヴィン・ジョーンズのドラムスの間から耳に届く。・・・

当時の気分を思い出し、阪大社会学の恩師・大村英昭先生の唱えた「煽りと鎮めの二元論」(たとえば『**日本人の心の習慣―鎮めの文化論**』日本放送出版協会 1997) に照らせば、20 代前半の当方は、中上氏のジャズ批評の過激なアジテーションに煽られつつも、ハルキ小説や河合ユングの神話的まどろみに鎮められる、不安定な精神生活を送っていたようだ (余談だが、宝塚市で寺の住職を兼任されていた大村先生は、「村上春樹さん家は、代々うちの檀家筋なんだよね」とおっしゃっていたが)。

『**みみずく**』によると、中上氏は村上氏の店にやってきたことがあるらしい。ジャズをめぐっては、戦闘的なジャズ批評家と、堅実なジャズ喫茶経営者として、二人は対峙した。初めての文芸誌での対談後、中上氏に飲みに誘われた村上氏は、きっぱりと断ったが、あのとき飲みに行っていれば面白かったかも・・・と、三十年後に回顧している。

ブンガクといえば「テーマ」「自我」「情念」だという当時の風潮に背を向け、筆の赴くまま行方も定めず、あたかも自動筆記のように神話を紡ぐごとく、物語を進める村上氏にとって、古今東西の神話や昔話、小説の背後に、人類共通の「集合的無意識」を措定する河合ユング理論は、まさしく「わが意を得た」思いだったのだろう。

牡蠣フライ超えの「嗜好品文学宣言」

あらかじめ決めておいたテーマを表現するのと真逆に、物語の自動運行にまかせていく村上氏にとって、小説の生命は「文体」だという。表現したいテーマに代わって、「文体」を究め、「集合的無意識」を目指すハルキ小説は、「猛烈にビールが飲みたくなる」という当方のデビュー作に対する第一印象通りだったのかもしれない。

『**みみずく**』の終わり近く、村上氏は好物の牡蠣フライになぞらえて言う。

・・・とにかく僕はその文章を読んだらもう、牡蠣フライ食べたくてしょうがなくなってくるとか、ビール飲みたくてしょうがなくなってくるとか、そういう物理的反応があるのがとにかく好きなんです。そしてそういう技術にさらにさらに磨きをかけたいという強い欲があります。とにかく物理的なフラストレーションを読者の中に埋め込んでしまいたい。・・・(中略)・・・テレビでおいしそうにジュージュー揚げている画面が映るじゃない。そんなんじゃなくて、とにかく字面を見ているだけで、牡蠣フライが無性に食べたくなってくるような文章を書きたい。・・・(中略)・・・現実の牡蠣フライより、もっと読者をそそりたい。・・・

これは、もう立派な「嗜好品文学宣言」といえよう。われわれとしては、もろ手を挙げて賛同したいが、よぶんなことをいえば、村上氏がノーベル賞をゲットできないのは、ことによると「テーマ」「自我」「情念」、さらにいえば政治思想性を固く排している、この「嗜好品文学性」のせいかもしれない。

『**みみずく**』以外でも、村上氏は数年おきに、HP 上で一般読者とオンライン直答するプロジェクトを行っている。この集合的叡智というか「集合的無意識」のアーカイブも、すでに何冊かまとめられている。その一冊『**村上さんのところ**』(新潮社 2015/2018) に、文学に対して否定的で、「その暇があったらビジネス書を読め！」とうるさい社長に憤る、会社員からの相談が寄せられる (#377)。会社員氏が社長に対して、「無駄 (エンターテイメント) な知識も人生においてはウイスキーのような嗜好品」として必要だと反論すると、「酒は最終的には全部流れる」といなされてしまう。

この相談に答えて、村上氏は「嗜好品文学の効

用」を説く。

・・・小説の優れた点は、読んでいるうちに、「嘘を検証する能力」が身についてくることです。小説というのはもともと嘘の集積みたいなものですから、長いあいだ小説を読んでいると、何が実のない嘘で、何が実のある嘘であるかを見分ける能力が自然に身についてきます。これはなかなか役に立ちます。実のある嘘には、目に見える真実以上の真実が含まれていますから。・・・(中略)・・・／（結論）／　小説はすぐには役に立たないけど、長いあいだにじわじわ役に立ってくる。・・・

こうして、「小確幸」と「文体中心主義」を核として、小説家の自我を超えた神話的な物語が深く進行していき、ついには人類普遍の「集合的無意識」に迫る村上文学が生まれ、成熟してきた。それは、文学界の新旧世代交代か、はたまた彼個人の特異体質か。それとも嗜好品に対する趨勢変化の同時代現象か。

笑いと嗜好

ジャンルは異なるが、興味深い対談・インタビュー書が、ベストセラーとなった。笑い、演芸の世界を理論化しようとした**ナイツ塙亘之＋中村計『言い訳　関東芸人はなぜ M-1 で勝てないのか』**（集英社 2019）である。

東西で、うどんだしが違うのは、最近では広く知られている。かつおだしに濃口醤油を合わせた関東の嗜好に対し、昆布だしに薄口醤油を合わせた関西の嗜好。今では、即席麺でさえ、関ケ原あたりを境に東西両仕様が、販売されているといった小ネタを耳にする。

もちろん、上方漫才という言葉があるくらいだから、笑いの嗜好も、東西で違うのだろう点は、なんとなく直感的にわかる。この「なんとなくの違い」を、「見える」化に努めたのが、本書**『言い訳』**だ。関東芸人の立場から、なぜ M-1 でなかなか勝てないのかを釈明したものだ。

しかも才能や技芸というアート系のボキャブラリーでなく、あたかも東西のだしの嗜好に類する冷静な語り口で、お笑いを分析している。M-1 が、もともと関西（吉本）に伝統的な「上方しゃべくり（日常会話）漫才」をベースにしており、しかも予選３分、本選決勝４分という、スピーディな短距離スプリンター型の勝負である点を指摘。通称「ヤホー漫才」で知られる、ローテンションで標準語、長距離ステイヤー型の自分たちコンビ、ナイツが、M-1 向きでない点を、嫌みなく「言い訳」している。いわば関東芸人にとって、M-1 はアウェイに乗り込む道場破りなのだと。

インバウンド、強度、飯テロ番組の影に

本以外にも、最近のテレビ番組に見る嗜好・嗜好品について、いわゆるメディア評も少し加えたい。トレンド・キイワードとしては、①インバウンド、②強度（大食い・激辛）、③飯テロである。

まず、「インバウンド」というのは、単に短期的な「外国人の日本観光」というよりは、もっと長期的な「外国人の目を通した日本的嗜好の再発見」である。食物から嗜好品、手工芸品、芸能まで、日本人には当たり前すぎたり、センスが古臭く感じられて等閑にされてきた嗜好を、それを愛好する外国人の新鮮な感性を通して、見直すトレンドである。

日本の伝統文化を、教養や文化遺産として紹介するのが、従来の NHK 番組のスタンス（**『COOL JAPAN』『Japanology　Plus』**）だとしたら、こちらのインバウンド型番組は、テレビ東京が発掘した新水脈であろう。**『You は何しに日本へ』**というお気楽なものから、**『世界！ニッポン行きたい人応援団』**という深掘り型のものまで、日本人が忘れていた古き良き趣味・嗜好を明るみに出した点で、意義深い。

後者でいえば、「日本酒」「寄木細工」「下町洋食」「カレーパン」「炊き込みご飯」など、日本人なら「当たり前」で済ませてしまう、手作りの工夫や叡知を、外国人がたどたどしい片言の日本語で、伝統職人に迫っていくのがミソ。門外不出の手練の秘技、いわゆる企業秘密（秘伝ダシの成分配合など）さえ、はるばる日本を訪れた純粋素朴な外国人マニアの前に、ホロリ感激して、ポロリと明

らかにしてしまう。後継者不在の家内生産・高齢職人の弟子として、外国人が受け入れられてしまう驚きがある。日本人ならではの嗜好が、日本の若者には忘れられ、無視されているのに、ネット動画だけでファンになった外国人が、高齢職人の心の奥底を打つ不思議がある。逆に言えば、もはや日本の若者の嗜好は、ガイジンより遠い「エイリアン」レベルになり果ててしまったのかもしれない。

次に、強度（大食い・激辛）を求める嗜好。こちらは各局問わずのテレビ番組や、Youtube などネット動画の定番コンテンツとして、定着した感がある。相変わらず、旨いものを求めるグルメ志向は根強い。が、上にあげた一部外国人のごとく、成熟した嗜好探究に向かうのでなく、単純な強度競争に向かいがちなのが、日本の若者たちの一大トレンドだ。

一回たかが数十分で食べ切る量を、3kg、4kg と目方で計ったり、何十皿、何十人前でカウントしたり、わかりやすいのは確かだが、情緒には欠ける。とくに、華奢な妙齢女性たちの間では、この「フードファイター志向」が強く、「実はアタシたち、こう見えて大食い・激辛女なんです」という、日本流の「＃Me,too 運動」ともなっている。たしかに「女なんだから、オチョボ口で大人しく食っとけ」という決めつけに対する、フェミニズムの発露としては結構なことだが。スポーツ的な強度見せびらかし競争は早く卒業して、より洗練された嗜好の深みを競うステージへと進んでもらいたい。

最後に、飯テロ。「飯テロリズム」の略と聞けば、いささか剣呑だが、実態は素朴・即物の極み。ダイエット・ブームのご時勢、賢者の夕食はさっさと早めに軽めに（糖質抜きで！）食後は間食もせず、清らかに眠りに就こうかという時間帯に、思わずそそる食事シーンがテレビやスマホ画面に映し出され、いたく食欲を刺激する。それが、飯による過激なテロル（リズム）・・・というわけだ。

とりわけ、中年男性が仕事終わりに、ふらりとメシ屋に立ち寄り、独白しながら一人飯を堪能する、深夜ドラマ**『孤独のグルメ』**（ただいま Season8 まで放映。こちらもテレビ東京。原作コミックは**久住昌之＋谷口ジロー『孤独のグルメ』**扶桑社 1997/2000 ほか）は、「深夜に胃袋を直撃」する番組として、多くの「深夜飯テロ」亜流ドラマをも生み出している。

20 代の食べ盛りならまだしも、いい大人になったら、夕食後、眠るまでの夜の時間は、まさしくオトナの嗜好品タイム。食欲やカロリーとは無縁の、酒・茶・コーヒー・タバコなどを嗜み、自由な手慰み、手遊びを楽しんでもらいたい。もちろん、おいしい酒や茶の悦楽は、旨い肴や御茶請けを希求することが多い。賢者の食卓や寝室は、飯テロならぬ、こうした「おつまみゲリラ」の出没にも、けっして警戒を怠れないだろうけれど。

話題のクイズ・バラエティ**『チコちゃんに叱られる』**（NHK 総合）では、人間や動物の嗜好の成り立ちを問うテーマが多く出題され、クールな解説を楽しませてもらっている。また現在進行形の NHK スペシャル、新シリーズ**『食の起源』**には、期待している。食品と嗜好品の境界領域を、生理学的解明だけでなく、人類進化から光を当てる試みに、新機軸が感じとれる。①ご飯 ②塩 ③脂 ④酒 ⑤美食 の５回シリーズ（④⑤未見）。

ご飯・塩・脂を見る限り、三者が主要食品でありながら嗜好性がきわめて高い点を、進化的、人類史的に説明。栄養食品と嗜好品を峻別してきた、古いカテゴリー枠組を打破し、いわゆる汎嗜好品主義に近く、われわれ研究会としては、大いに歓迎できる内容だ。NHK のことだから、いずれ書物化して、栄養学では捉えきれない、食物の嗜好品性を十分に記述してくれるだろうと思う。あくまで、われわれのいう SHIKOHIN は、単なる"luxury items"（贅沢品）ではなく、"refreshing favorites／anti-stressors"（気分転換できる、お気に入り品／抗ストレス要因）なのだから。

（了）

嗜好品文化研究

第5号
(2020)

特集　嗜好品とAI

AIは〈味覚／趣味〉変容の精妙さを思考しうるか
—E・バーク美学で読む人間的成熟と崇高な嗜好……桑島 秀樹
味と匂いの可視化にAIは使えるか……都甲 潔
AI社会での愉しみ方……江間 有沙
AIと嗜好品をめぐって……髙田 公理
嗜好品とAI［討論］第17回嗜好品文化フォーラム（2019.5.11）報告
江間 有沙／太田 心平／斎藤 光／髙田 公理／藤本 憲一　（司会）井野瀬 久美惠

連載

今、「嗜好品の世界史」を書くということ（上）……井野瀬 久美惠

論文

文人雅遊と煎茶書 —『青湾茶話』を中心に……梁 旭璋
ロシアの茶の歴史と現在の喫茶事情……廣部 綾乃
嗜好品からドラッグへ —イギリス・オランダのイエメン人とカート……大坪 玲子
日本のシガレットのパッケージデザインの特徴とは……山本 拓哉
表出する情動，試論 —音楽と「建てること」をめぐって……田中 理恵子

書評

「小確幸」文学から、「食の起源」まで……藤本 憲一

嗜好品文化研究会

研究誌　嗜好品文化研究　第５号（2020）

編集・発行　嗜好品文化研究会
［事務局］
〒604-0863 京都市中京区夷川通室町東入巴町83番地（株）CDI 内
表紙デザイン　大平年春
編集レイアウト　CDI 箕輪真紀
発行日　2020 年 3 月 31 日
印刷　協和印刷株式会社　無断転載禁止
頒価　1,000 円（税込）

©2020　嗜好品文化研究会
Printed and Bound in Japan　ISSN　2432-0862